

見えない問題は解決できない

伊藤 詩織

#MeToo ムーブメントのきっかけとなったハリウッドの映画界で権力を握っていた大物プロデューサーの性暴力。それを調査報道したニューヨーク・タイムズ紙の記者ジョディー・カンター氏にインタビューしたときの言葉を最近、何度も思い出している。とても当たり前のんだけど、改めてメディアの役割は、問題を可視化していくことなのだとリマインドさせられる。

しかし、性暴力のケースとなると報道はおよび腰になる。そして多くのケースはパワーバランスが対等でない関係性で発生するため、加害者が力や権力をもっている場合、周囲は事実を無視してきた。また、最悪の場合は「不可視化」されてきたのだ。大きく注目されたジャーニー喜多川氏の性的加害と沈黙、それも傍観した周囲とメディアの大きな罪だ。報道のリスク回避は、どれだけ取材を重ね、証言、証拠を集めていくかにかかっている。しかし、日本の報道のリスク回避は時にして、右を見て左を見て、他の報道機関が事件に手を出していないのであれば、我々も控えようとなる。捜査機関、検察が出した結果を鵜呑みにすることが安全であり、その結果を伝えていく広報的なものをよく目にする。

「ジャーナリズムの役割、それは権力の番犬であること」。これは長年にわたったカトリック教会牧師の少年たちへの性的加害を突き止めた、アメリカのボストン・グローブ紙の調査報道チーム、スポットライトの所属記者の言葉だ。地元の権力者である聖職者を守るため、捜査機関さえも見て見ぬふりをしてきた加害を地道な聞き込みと証拠集めという調査報道の力で世間に直視させたケースだ。証言を集めるということは、会見で命を削りながら、顔や名前を出し語っている人の声を搾取するだけではない。日本の性暴力報道は公で語ってきた人の声、会見という形で語ってきた人の声に頼りすぎではないだろうか。

事件が起こってからでは遅い。被害者の語る言葉にすがってはいけないのだ。真のリスクは知ろうとしないこと、取材をしないことにある。



PROFILE

いとうしおり：ジャーナリスト、作家、ドキュメンタリー映画製作者。BBC、アルジャジーラ、エコノミストなど、主に海外メディアで発信。国際メディア賞ニューヨーク・フェスティバル2018で『孤独な死』（CNA）と『レーシング・イン・コカイン・バレー』（アルジャジーラ）が2部門で銀賞受賞。主な著書に『裸で泳ぐ』（岩波書店、2022）、『ブラック・ボックス』（文藝春秋、2022）は9カ国語で翻訳、第7回自由報道協会賞大賞。